伊藤整全集

第五卷

河出書房

伊藤整全集　第五巻

昭和三十一年九月一日　第二次初版印刷
昭和三十一年九月五日　第二次初版發行

定價　貳百七拾圓
地方定價　貳百七拾五圓

著者　伊藤整
東京都千代田區神田小川町三丁目八番地

發行者　河出孝雄
東京都文京區柳町二六番地

印刷者　山元正宜

發行所　東京都千代田區神田小川町三ノ八　株式會社　河出書房
電話東京(29)三七二一番

© 1956　印刷・三晃印刷

目　次

得能五郎の生活と意見……五
一　空地耕作……六
二　再び空地耕作……三
三　鞭……三六
四　新聞讀み……四八
五　マルブルウの歌……五七
六　再びマルブルウの歌……七四
七　トロイカ……八八
八　交通機關について……一〇四
九　三十五歳の紳士……一二八

十　座　談……一三〇
十一　櫻谷多助のノオト……一五八
十二　得能先生の登校……一七五
得能物語……二一三
人間の顔……二一四
鯉の頭……二二三
砂谷村風土記……二三二
砂谷村人物傳……二四一
櫻谷と得能……二五八
櫻谷の日記……二七五
蝶の話……二八六
葛の葉……三〇四

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

蟻の挿話……三三
勸進帳……三三〇
得能の炊事……三五五
歴史の波……三八〇
解説……瀬沼茂樹……三九三

裝幀

岡本芳雄

得能五郎の生活と意見

一　空地耕作

得野五郎は、隣の室で食事をする二人の子供の物音で眼が覺める。ほら、エプロンをしないで食べている人はだあれ、とか、おみおつけを殘してはいけません、などいう里子の聲に混つて、茶碗の音がし、やがて、忘れものはありませんか、という聲に送られて、行つて參りまあす、と玄關の硝子戸をぴしやんとはげしく閉める。そして玄關から三尺ほどしか離れていない門のそとの敷石をわたつてゆく二年生の一郎と一年生の二郎の、かたことという小さな靴音が耳に入るようなときは、寢足りた氣持で次第に眼が覺めて來ている。

そのときでも、彼は注意深く睡眠の量をはかる。もう眠りが足りたかどうか、彼は容器のなかで何かの液體をゆすぶるように頭をすこし動かして見る。その動搖が頭の隅々まで行きわたるようだと眠りが足りたと思うのだ。すると得能は、枕もとの新聞に手をのばし、印刷インクの匂いをかぎながらそれを擴げる。この頃（というのは昭和十五年即ち一九四〇年の春から夏にかけて）得能は、新聞をひろげるや否や、忽ち頭がはつきりとし、政治外交面の見出しに眼を走らせる。對華戰爭が四年續いている上に、ヨオロッパでの戰爭がノルウェイからオランダ、ベルギイ、フランスと、次々に區域を擴げて行つているので、朝ごとに、次はどうなつているかという期待でもつて新聞をひろげるのだ。

三年前の七月には對華戰爭が北京の郊外に起つて、全中國に波及し、日本は華北一帶と揚子江の流域に兵を進め、上海、南京、徐州、漢口、廣東、南寧を占領した。そして占領地域の治安工作に苦心している。ところが去年の九月に、ドイツがポオランドに侵入し、同時にイギリスとフランスがドイツに宣戰した。その後今年の四月までは、英佛とドイツはたがいに時おり小さな戰鬪や空襲をしているだけであつたが、四月八日にイギリスがノルウェイの沿岸に機械水雷を敷設したと發表すると、翌九日にはドイツはデンマアク全土を占領し、海を渡つてノルウェイのオスロに兵を進めた。ドイツがノルウェイの飛行場を占領したとか、イギリスとフランスがノルウェイ中部の港に上陸したとか、更にその中部ノルウェイから英佛軍が撤退したとか、北部ノルウェイの鐵鑛輸出港ナルヴィクではドイツの驅逐艦七隻がイギリス海軍に沈められたとか、イギリスの戰艦がナルヴィクの沖でドイツの飛行機に擊沈され、それが海軍力に對する空軍力の優越を史上はじめて證明したと

か、そういう騒然たる記事が、毎日の新聞を埋めていた。

ドイツ軍は五月十日に更に突如オランダ、ベルギイに侵入し、一週間のうちにオランダ軍を降伏させ、ベルギイの首府ブラッセルに入城した。得能は、英佛側とドイツ側と中立國の報道とを丹念にくらべ、毎朝長いことかかつて新聞を讀む習慣である。朝得能が眼を覺ませば、どういうことがはじまつているかわからないのである。うつかり八九時間も眠つて、ヨオロッパのこの壯大な事件の進行から自分が眼を放していたらそのあいだにも、砲彈が破裂し、武裝した兵や戰車が他國に殺到し、死にかけた人間が顏をゆがめ、國王は國を失い、彈丸の中に右往左往する人民がいる、という想念で得能は寢覺めぎわの眼をぱちぱちさせる。もつとしつかり覺めないと、何か勘違いをするぞという警戒心が湧く。日華事變がはじまつてから、彼は屢々そういう、俺は今こうしていていいのだろうかという衝動を受ける。

というのは、彼の日常生活があまり平穩で、自分の國の兵士たちが中國で戰い、毎日負傷したり、死んだりしているその同じ日、自分は、毎日八時間眠らなければ仕事ができないと言つて、眠り足りるだけ眠り、寢床のなかで三種もの新聞を隅から隅まで讀みつくさないうちは起き出さないという朝寢の習慣を守りとおしているからである。得能は晝間でも、時おり、はつと思うことがある。電車の中ではつとしてあたりを見まわすと、やつぱり小學生は樂り合つており、紳士らしい男はまことに無爲な顏で正面を向いて腰かけており、品のよいお婆さんが風呂敷包みに白い手をのせている。窓の外を、百貨店の二三階だとか、商店の看板のようなものが動いてゆく。彼の身のまわりにはそういう靜かな、市民的な風景しかない。そうすると、ああ、自分もそういう風景なかの一員なのだ、それでいい、という氣持で、ポケットから小型の書物を出して讀みはじめる。

しかし得能家の生活や、彼のまわりの市民たちの生活にも、かなり濃く戰時の影が及んでいる。對華戰爭のはじまつた一年目、二年目までは、應召した友人や町内の人を見送ることや、そういう見送りの群集に街や驛頭で逢うこと、千人針を手にした少女や老婆や細君らしい女性たちを街頭で見かけることが、生活においての戰時色の主なものであつたが、今はもつと違つた日常生活の細かな部分にそれが及んで來ている。そして表面だけは穩やかなのだ。

得能は新聞を讀み終ると、枕もとの郵便物に眼をとおす。たいていそれは、帶封をした鄕里の新聞とハトロン紙の封筒に入つた二三種の雜誌（これは、主に同人雜誌という、文學を研究する人々の團體が小部數刷つて文學者仲間

に配る研究的な薄い雜誌であるが、その他に商業的に廣く賣り出されている雜誌の寄贈されるものもある）と、文學者である得能に原稿を依頼したり、催促したりする手紙の類と、いろんな會合や映畫の試寫會などの案内狀などである。彼はそれ等の郵便物の中から一つ二つを開いて見るだけで、あとはそのまま重ねてしまう。そして、腕を大きく伸ばし、うんと寢床の上で反つて、

「うわあつ！」という、大聲を發してあくびをする。それは餘程大きな聲であつて、得能自身は口を開いた瞬間には、顎骨のつけ根にあたる耳の邊がきくりと鳴つて、耳の調子が狂うのでよく聞えないが、襖のかげに坐つている妻の里子は、

「ああ、びつくりした」と、必ずその度に言うのである。

「よして下さいな、近所隣にみつともないから」

兩隣と裏の家とは、それぞれ二間乃至三間ぐらいしか離れていないので、夏などは北窓をすつかり開けて簾を下げているだけだから、裏の家とは一軒の家のようになつてしまう。里子が言うのも尤もである。しかし得能はやめるわけにゆかない。このあくびの癖のついたのは何年ぐらい前のことか知らないが、今ではそれをしなければ、得能は、自分の身體や心に一日のはじまりの區切りをつけることができないようになつている。この場合は、よし、これで今日の世界の形勢はわかつた、さていよいよ、自分も起き出そうか、というほどの意味なのである。得能はふだん、極く紳士らしく身を持している。隣近所の人に逢うと、にこにこして鄭重に帽子をとつて挨拶するか、または數年來の見慣り越しであるにかかわらず口を利いたことのない人には苦蟲を嚙みつぶしたような不愛想な知らぬ顏をする。どちらにしても、近所の人に話しかけるということは殆んどない。ともかく得能は、そういう紳士らしい身の持しかたをしている自分の殼をも、いま、この吠えるようなあくびで一擧に吹きとばしてしまい、自分の水々しい精氣を、眠り足りた朝の體内から湧き上らせよう、という氣持だ。裏や隣の人に對してはみつともないが、得能にすれば、僕はなにもあなた方に見せているあの顏のような紳士じやないのですよ、何とでも勝手に思つて下さいよ、という横着な氣持になつている。そのあくびをやらずには、得能の日ははじまらないのである。

彼は水で顏を洗い、簡單な食事をする。食事がすむと彼はもう階下の室にいる用がない。女中が彼の食べた茶碗類をさげてゆき、里子が縫い物をひろげたり、寢臺に寢に行つたり（里子は病弱なので、一年のうち四分の一ぐらいの日數は寢臺で寢ころんだり、起きたりしている）してしまうと、彼のまわりの疊には、何もなくなり、いよいよ自分

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

の仕事に向うときである。

そこで得能は、もう一度、

「うわあつ！」とあくびをして、兩腕を天井の方に突きあげ、それから「さあて、何をしようかなあ」と言う。

彼はそう言いながら、茶の間の棚にある小型の置時計を見るのだが、ほとんどきまつてそれは十時半を指している。彼が前夜友人と街で逢つて十二時か一時頃まで喋つたり酒を飲んだり（もつともそれは昨年頃までのことで、今年から街で酒を飲む場所は十一時に店を閉めるようになつた）したときだとか、原稿を渡す約束の日がいよいよ切迫して夜明けまで起きて書いていたときなどをのぞけば、得能は十二時頃に眠り、八時頃眼を覺まし、新聞を二時間ほどかかつて讀み、三十分で朝食をする。そして、濟むのが十時半であるという風にほぼきまつた形を取つている。

すると里子はまた得能をたしなめる。

「その、わあつて言うのを聞く度に、私は胸がどきどきして困るのよ。ほんとにみつともないわ」

子供たちもまた學校へ行く年頃までに、得能のその癖をすつかり見覺えてしまつているのだろう、日曜とか夏休みなどになると、朝の十時ごろ得能のあくびのすぐ後について、一郎は父親に似た細い腕で天井の方を突きながら、

「うわあつ！　さあて、何をしようかなあ」とやる。二郎も縁側で遊びすぎたりして自發的な自然なあくびをするときやつぱりその形式で、

「うわあつ！」と小型にやる。それを見るときは、さすがに得能も、おかしくもあり、心配にもなつてくる。こいつはいけない、と思つた。とにかく、子供のいるところでは、この獸の吠えるようなやつは、やめなければいけない。

今日は得能は、子供がいないので、思い切り大きくあくびをしてから郵便物を持つて、二階の書齋へ上つて行つた。南北に長い六疊間で、南側に一間半、北側に一間の硝子窓がついている。西側の床の間は、三方の壁が本で一面にふさがつており、眞中も、雜誌類や小包で送つて來たまま解いていない本などでふさがつている。その隣の押入も本を詰めた箱で一ぱいになつており、反對の東側の壁にも本棚が二つ寄せかけてある。彼のような仕事をする人間としては、本は多い方ではないが、それでもこの貧弱な貸家の二階は、本のためにどことなくゆるんでおり、彼が室内を歩くと、ゆらゆらと搖れ動くのである。今朝彼は南側の窓を開いて、外を眺めた。そして、いよいよ、これはこうしていられない、と思つた。というのは、彼の開拓事業が、中途で放棄されたまま、眼の前の原つぱにまざまざと見えているからである。

得能の住んでいるこの東京の新市域、つまり實質的には

郊外は、まだそう家が立てこんでいるという程でない。彼の家の東、北、西には、二間か三間ぐらいのあいだをおいて家が建つていて、その一劃だけ、遠くから見ると、原つぱの中に身を寄せ合うように四五軒の二階家が同じ恰好でくつついているが、そのまわりは、まだ大方草原と畑である。ただその一群の家屋の西側だけは道沿いに家が五六軒つづいていて、バスの通る家並通りにつながつている。得能の家の南側は、腰から頭の邊までの高さの目かくしの板塀で圍われており、その前に幅二間の道路が東西に走つている。その道路の南側は、草ぼうぼうの空地だ。もつともその空地は一町四方ほどずつに區切られて、道路と簡單な下水の溝ができているから、住宅地として賣り出しているのであろう。

その原つぱを二町ほど突つ切つた先に、西方から東方へと川が流れている。得能が、建つてすぐのこの家へ越して來てから、その川は護岸工事をされて、兩岸はコンクリイトで二尺ほど地面よりも高くなつている。川幅は四間ほどある。そして得能の家の正面から見えるあたりにはコンクリイトの橋ができた。川の向う岸は、高臺になつて、崖に一面の樹木が生えている。この高臺は女學校の建築豫定地になつている。しかし得能はそういう地勢をいま眺めているわけではない。彼の見ているのは、すぐ家の前の、道路を越した空地である。彼の家の前は赤土がむき出しになつており、ちようど家が一軒建つぐらいが掘りかえされて畑になつている。その三分の一ぐらいには馬鈴薯が五寸ほど芽を出している。その右手には玉蜀黍が三列ほど、これは細い華奢な芽がやつぱり五六寸に伸びている。ずつと手前の道路寄りには、葱畑が二坪ほどあるが、そのまわりは草が一面に茂つている。それから馬鈴薯畑の左の方の五六坪の空地は、赤土が一部掘りかえされて、三尺ほどの山になり、その手前の部分は黑い土ののぞいた塹壕のような穴になつている。それは得能がいま開墾している部分なのだ。

得能は、ここへ越して來てから滿四年ほどになり、その一劃の五軒の中では、大家よりも古い（大家は舊市内に住んでいたが、後にここの自分の持ち家に越して來たのだ）のであるが、土地の「開墾」については一番新しく、今年からはじめたのだ。この邊一帶の空地の持ち主は誰なのかよくわからないが、住んでいる者は自分の家のまわりの空地に勝手に畑をつくつている。ことに去年あたりからそれが非常な勢いで流行つて來た。得能の西隣にいる大家の佐野さんと、東隣にいる電氣技師の上野さんは一昨年頃からやつていて、一番熱心である。

「一體、こうして皆で土地を耕しているのだが、地主は誰なのでしようね？」

と自分たちの耕した畑の境界に集まつて皆で話し合つていたことがある。五十歳ぐらいの、肥つて頬の赤い大家の佐野夫人は、割烹着に、ナイトキャップ風な、縁が波形に縮れた白い木綿の大黒さまの頭巾のようなものをかぶつている。佐野夫人の説明によると、

「この帽子は」と、滑稽なんですよという風にまず笑つてから「娘の學校でつかつた運動帽があつたものですから、髪が風に吹かれないようにと思いましてねえ」

それとむかい合つている電氣技師の上野さんは、職工用の青ズボンに白シャツで、いつも黒いチョッキをつけて、テニスの白い帽子の縁のはね上つたのをかぶつている。一本道路をへだてた裏通りの池田君（これは得能の友人で詩人であるが、この頃出版業をはじめた）のお母さんは、身だしなみのいいきちんとしたふだん着のままで、老眼鏡のかげから娘のようなくるくるした眼を動かしている。

「いや、あれですよ、あすこの土地整理組合に、角の石田さんが行つて訊いたところによると、買い手がつくまでは自由に畑をつくつていていいと言つたそうですよ」

「なら大丈夫ですね」

「ええ、もう、そんなら、心配なことありませんわ」

そう言つて、皆は自分のつくつた十坪か十五坪ほどの畑の、赤目芋の出かかつた芽だとか、馬鈴薯や、青豌豆などを見まわした。バスの道路に面して、「H土地整理組合事務所」というバラックの平家建ての事務所があつて、町内のものはそこで電話を借りる習慣になつている。そこには、神經質らしい眼鏡をかけた五十年配の役所の吏員風の男と、現場監督風の三十歳ほどのニッカアボッカアを穿いた青年とがいて、テエブルに一ぱいになるような青寫眞を擴げていたり、それに何か記入したりしている。また時には着流しの、もとはこの邊の農夫であつたらしい素朴でいてしかし何か自ら恃むところもある顔をした地主風の男が二三人集まつて將棋をさしたりしている。土地整理組合とはそこのことであるが、それにしても地主が直接の發言權を持つていないのだろうか。きつと地主というのはこの邊の古い農家で、バス通りの向うの柿の樹のある草葺きの家などそれなのだろうが、いつかぶらりとやつて來て、こんな風に勝手に畑をつくられては困りますねえ、と言い出しはしないだろうか。どうもありそうなことである。かと言つて誰も自分からその土地の地主を確かめて、許可を受けに行く者はない。皆がやつているではないか、と隣の畑を見ては、どうせその時は一緒だ、と思つたり、藪蛇だと思つたりする。新聞が國民にすすめている空地利用の非常時の食糧生産には反對もしないだろう、とも思う。この邊の土地は眞黒な壤土が三尺も四尺も掘つても盡きず、肥えて

いて、ものがよくできる。だが處々、買い主がきまつた處は、よそから土を運んで來て土盛りをしている。得能の家の眞前もそれで、赤土で土盛りしたので、そこだけはあまり草も生えず、誰も耕そうとはしない。

「もつとも、ここはいいのですよ」と佐野夫人は、その赤土を、ある日發念してシャヴェルで鋤き起しはじめた得能に言つた。「ここん處は、私の家の前と地續きで、この家」と佐野夫人は自分の家及びその店子である得能家や上野家などを一括して指した。「の地主の土地なんですよ。そして、家を建てるまでお使い下さいと私に申していたんですから」

「はあ」と、得能は、それではこの土地の使用はあなたの許可がいるのでしたかという顏になつて、娘の運動帽をすつぽりとかぶつた肥つた佐野夫人を見上げた。しかし佐野夫人は、拘泥せず、「私も家の前を少しやつて見ましたが、ここは赤土でも何ですよ、よく耕せば、作物のできはそう違いませんですね」と自家の前の赤土に生えている靑豌豆の畝を指差して見せた。

東隣の上野家の横や正面は盛り土をしていないので、見事な黑土である。この邊は、上野家、佐野家、石田家、池田家、それから自轉車に乘つて日曜毎に現われる見知らぬ男などが、それぞれ畑をつくつている。その眞中邊に、里子も三坪ほどつくつてあるというのだが、得能にはどこがそれかわからなかつた。病弱な里子がつまらぬことをして、また身體を悪くするだろう、と思い、不愉快になつて、行つて見ようともしなかつたのである。あとでわかつたことだが、上野家の東方と南方のその肥えた土地の各家の畑の境界というのは、まことに理解しがたい。この角の邊は石田家、その西側は池田家、その二つの畑に沿つた南側が佐野家、それから上野家。また佐野家の畑は道路を越えて東方にも少しある。また南側の道を越えた處は上野家と、以前得能家の裏の家の二階を借りていて、今は近くのアパートにいる自動車の運轉手さん、それからやつぱり得能家の裏の家の室を借りていた別な運轉手さんの耕した處で、多分今年は裏の水田家で耕すであろうと思われる畑、それから得能五郎の友人で四五町はなれた處に住んでいる運送屋の松澤が耕した下水寄りの二坪ほどの土地、それ等の眞中に殘つた不規則な階段形の三坪ほどが里子の畑で、その南側は日曜日毎にどこからともなく自轉車で鍬とシャヴェルを持つてやつて來て、誰とも口を利かずに大變上手に畑をつくる戰鬪帽の男の畑、という風になつている。讀者も到底理解できないだろうと思うが、とにかくそこにあるいい畑は悉く耕されてしまい、あとの草のぼうぼうと生えた廣い野原は、各自の家から遠くもあり、また地味がよくな

いらしいので、誰も進んで耕そうとしない。しかし家の近くは土地の良し悪しにかかわらず皆耕しているが、得能家の前の赤土だけが殘つていたのだつた。

どうして得能がそこを耕すことに心をきめたか、というと、それは正に時局のせいであつた。去年頃から、紙の不足ということが出版や新聞雜誌に關係する方面で問題になつてきた。毎朝得能が讀んでいる新聞にしても、一昨年頃まで、朝刊が十二頁あつたのに今では八頁になつている。中には毎週二回は朝刊四頁というのすらある。四頁というのは、一枚きりのことである。雜誌は眼に見えて頁數が減り、出版屋では紙がないので豫定したものも活字に組んだきり本にならないという話も聞く。紙は一昨年頃の四割とか五割しか生產されていないのだという。今年の秋頃から用紙の減少は更に甚しくなるだろうと豫想されていた。また米が不足して外米が六七割も混入されたり、肉類が足りなくなつたりした。得能は不安になつて來た。戰爭が四年も續いているのだから、文學などという仕事がその以前と同じように存續できなくなることもやむを得ない。今までもやつと生活してきたのだから、いよいよ紙が足りなくなつて、大して商品價値があるというでもない彼の書くものなどをのせる雜誌面がなくなつたり、彼の書物を出版する紙がなくなる場合のことを考えなければならない。去年の九月歐洲戰爭がはじまつてから、彼のその心配はいよいよつのつて來た。

訪ねて來る友人をつかまえては必ず彼はそういう話をした。

「いや大丈夫ですよ」とある友人はにやにやしながら、そんな先きのことまで心配できるぐらいならまあいい方だよ、という表情をする。

またある友人は、まるで戯談にとつてしまう。そして、「君には學校の收入があるじやないか」と責めるような調子で言う。

なるほど得能は私立の大和大學の藝術科というのに週二回ずつ教えに行つている。しかし、そこで得る收入はちようど家賃にしかならないのだが、得能はその額のことは口にしない。

「とにかく、春から僕はこの家の空地に野菜や薯をつくつて、食糧を確保する。米代だけなら何とかして稼いでゆけるだろう」と得能はある日里子に言つた。

「本當？」と、今まで一度も植木や草花をいじる得能を見たことのない里子はあてにしない顏をした。

彼はいま自分の携わつている仕事が報酬を與えなくなることを、あまり遠くない將來のこととしてありありと思い浮べる。そのときどうするか、という彼の不安に答えるよ

うに、彼の頭には十年前に鄕里の田舍で二年ほど中學校の教師をしていたときの自分が浮んで來た。村の產業組合に勤めている弟夫婦のもとにいる母は年とつた。母のつくつていた裏の野菜畑を、自分たちが耕すようなことになるだろう。そうして自分はまた毎朝一里ほどの山道を歩いて隣町のあの中學校に勤めながら、そのときこそ落ちついて、どうしても今までとりかかれずにいた亡父の生涯についての物語を書いて見ようか。それとも東京にこのままいて、きちんと毎朝早く家を出る勤め人になつた方がいいかしら。家の前の野原の草の色が朝毎に濃くなつてゆくのを窓際の椅子に掛けて眺めながら、春の初め頃得能はそんなことを考えていた。

春になると、今年は食糧不足にそなえて、都會のあらゆる空地に馬鈴薯をつくれ、種薯は區役所で無料頒布する、というような記事が新聞に現われた。畑をつくつている隣近所の人たちも、早目に去年の自分の畑に鍬を入れ、肥料をくれたり、何か播いたり、溫床らしい圍いまでつくりはじめた。得能は一日じゆう二階の窓際のテエブルで原稿を書き、疲れると疊にごろりと横になる、という、それ等の人々の勤勉さに較べたら、きつと忌わしく見えるにちがいない、のらくらした生きかたを相かわらずしていた。野菜をつくるなどと里子に言つたことは忘れたようだつた。たいていの日、着流しの友人がやつて來ては、彼の室で窓を開けて煙草を喫いながらお喋りをする。

「あの原つぱの中にあるあの大きな棒杭は何だい？」と客が言う。

「ああ、あれか、あの『屑物商絕對反對』だろう」と得能が答える。「あれは僕の生活にもかなり關係があるんだ。あの川の向う側の崖下に柵をめぐらした場所があるだろう。あすこに屑物商の市場ができるというのだ。すると、この邊の住宅地の値が下がるというので、地主たちが共同で示威運動しているんだ。ほら橋の袂にも建つているだろう。しかし、崖の上に女學校が建つから、屑物市場は許可にならないだろうという說もある。若しあすこに屑物の山ができたら一番困るのは僕の家さ。二町ほど離れてはいるが、その間はがらあきの原つぱだし、夏は向うが風上の眞南だからね」

喋りながら得能は、何だかその棒杭を滑稽だと思うのである。多分あの電話を借りに彼がときどき行く土地整理組合に集まつている、自然にだけ見開かれた農夫の無表情な顏のかげで、今は專ら地代とか債權債務ということばかり考えて生活しているらしいこの郊外の地主たちが、ああいう文句を使うことを考えたのだ。ああいう何々絕對反對という表現は、數年前までは警察官に睨まれる社會運動をす

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.